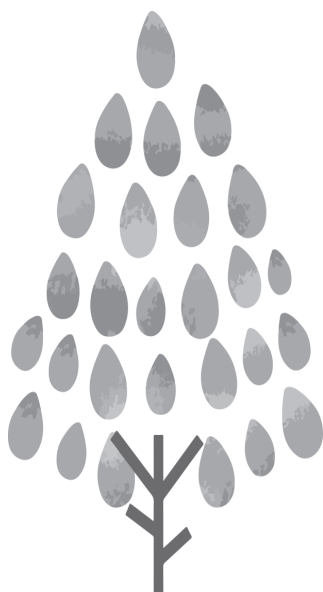


日本スポーツ心理学会認定 スポーツメンタルトレーニング指導士 ニュースレター

Certified Mental Training Consultant in Sport

第18号

2021年5月



I. 巻頭言(提言) 資格委員会委員長 立谷泰久 (JISS)	1
II. 資質向上部門・資格審査部門・社会連携部門長の報告・抱負	
・武田大輔(東海大学)	2
・秋葉茂季(国士舘大学)	3
・菅生貴之(大阪体育大学)	4
III. 資格取得者の抱負	
・坂中尚哉(香川大学大学院)	5
・中村珍晴(神戸学院大学)	6
IV. 各地区の活動報告	6
・北海道・東北地区:小谷克彦(北海道教育大学)	7
・関東地区:平木貴子(日本大学)	8
・東海・北信越地区:村山孝之(金沢大学)	9
・関西地区:筒井香(株式会社BorderLeSS)	10
・中国・四国地区:崔回淑(環太平洋大学)	12
・九州・沖縄地区:内田若希(九州大学)	13
VI. 研修会・傍聴記	
・門岡晋(金沢星稜大学)	14
・相川聖(日本体育大学大学院)	15
VIII. 事務局からのお知らせ	16
IX. 編集後記:菅生貴之(大阪体育大学)	20

I. 巻頭言 (提言)

「1ターム」を終えて

資格委員会委員長 立谷 泰久 (JISS)

土屋裕睦先生(大阪体育大学)より資格委員長を引き継いで、1年数か月が経ちました。この間、資格委員会の年間スケジュールを確認しながら、そして前委員長の土屋先生にいろいろと教えていただきながら、資格委員の皆さんと運営して参り

ました。COVID-19の感染拡大の影響で、引き継ぎがスムーズにいかず、新規資格取得の皆さんや更新の皆さんへの連絡が遅れたり、ニュースレターの発行が滞ったりして、大変ご迷惑をお掛けしました。この場をお借りして、お詫び申し上げます。



そして、改めまして、これまで重要な業務を遂行してこられた、歴代の委員長はじめ事務局の皆さんの大変さを実感しております。またこの場をお借りして、感謝申し上げます。

この1年間は、世界中のありとあらゆるところでCOVID-19の感染拡大の影響を多大に受けました。本学会もその影響を受け、2020年度の学会大会、そしてSMT資格認定講習会および指導士全国研修会もオンライン開催となりました。初めてのオンライン開催ということで少々不安もありましたが、11/22(日)の資格認定講習会は受講された皆さんが積極的な姿勢で参加され、素晴らしい講習会となりました。また、11/23(月・祝)のSMT全国研修会は、オンライン開催ということもあり多数のご参加を受け、それゆえに失敗はできない思いながら進めて参りました。大きな滞りもなく、そして何より大変充実した内容で開催できました。また、資格更新と新規資格取得の認定業務も無事終え、年間スケジュールの「1ターム」を何とか終了できそうで、ホッとしているところです。

昨年度のこのニュースレターでは、資質向上の重要性について書かせていただきました。このことについてもCOVID-19の感染拡大の影響を受け、いろいろと考えさせられました。「これまで対面で行ってきた研修会をどうするのか?」「事例検討会は行えるのか?」など、資格委員会の中で議論し

ながら進めてきました。今後は、本研修会も「新しい生活様式」に合わせた形を作っていかなければならないと思っています。

2021年度は、二つのオリンピック・パラリンピックが開催される予定です(2021年7月~東京、2022年2月~北京)。SMT指導士として活躍される先生方もいらっしゃると思います。コロナ禍の中のサポート活動は本当に大変だと思いますが、皆さんのこのご経験は必ず次につながると思いますので、ぜひ「レガシー」として後世に残していただきたいと思っています。

また2021年度は、「SMT資格認定20周年記念事業」という大きなイベントを予定しております。このコロナ禍の中、どのように実施・運営していくのかを資格委員の中でも議論しています。もちろん、資格委員だけではできませんので、資格取得者の皆さん、学会員の皆さんには、是非ご協力いただきたいと思っています。その際にはどうぞよろしく願いいたします。

改めてとなりますが、資格委員会は、4名の委員(武田大輔資格審査部門長・副資格委員長、菅生貴之社会連携部門長、秋葉茂季資質向上部門長、立谷)と、部門員の皆さんのお力を借りて、何とかやっております。いろいろと滞ることも多々あり、皆さんにはご迷惑をお掛けしていますが、ご理解をいただけますと幸いです。今後ともよろしく願いいたします。

II. 資質向上部門・資格審査部門・社会連携部門長の報告・抱負

2020年度資格審査部門の活動の振り返り

資格審査部門長 武田 大輔 (東海大学)

2019年11月の本学会大会を区切りに、土屋前委員長から立谷現委員長へと委員会がバトンタッチされました。部門員の委嘱期間は委員会委員のそれと異なり、年度となりますので、最初に資格審査部門員を紹介します。資格委員会委員である立谷先生、菅生先生、秋葉先生に加えて、土屋裕陸先生(本学会副会長、大阪体育大学)、荒井弘和

先生(法政大学)から構成されます。

最初に取り組んだのは、資格に関する諸規定や手引きを見直すことでした。前委員会にて取り組んだ規定の一部改定に合わせて、手引きの修正を試みました。それでも今年度の認定作業において、さらなる修正点が見つかりました。これらは次年度には整備したいと考えております。また、学会



ウェブサイトにある指導士のページを少し変更しました。資格保有者専用ページの作成や認定・更新に関するQ&Aなどです。これらはまだまだ十分に活用できているレベルにはありませんが、少しずつ機能的になるよう更新していこうと思います。資格保有者や学会員からのアイデアなども待ちたいところです。

本年度は、新たに10名の新規資格取得者を認定する予定です(本原稿は最終の認定前に執筆しております)。取得手続きの中で行われた資格取得講習会は、例年までの内容を刷新しました。本資格はスポーツ心理学会という“学術団体が認定する資格”であるため、その意味を考える機会として学会長である山本裕二先生から「資格と責務」というテーマで最初のレクチャーをお願いしました。その後は、委員会委員の経験を題材とし、「対象者の特性・特徴を考えたサポートの重要性(立谷先生)」、「SMT指導士の社会連携における情報発信の際の注意点(菅生先生)」、「自己研鑽の意義と資質向上の機会(秋葉先生)」、「事例検討をすることの意味(武田)」といったテーマでレクチャーが展開されました。初めてのオンライン開催でありましたが、最初の山本会長のレクチャーでは資格保有者の責任の重さについて、委員を含んだ参加者全員が感じ取り、心地よい緊張感を抱くスタートでした。その後の各委員によるレクチャーは、委員の経験が題材となっていたためか、受講者にとっ

てもそれぞれの経験に新たな刺激が加わったようで、豊富なディスカッションが展開された時間となりました。オンラインの利点でもある録画をしていなかったことを悔やんだのですが、その場にいる者らによる一回勝負だからこそその価値があったのだろうと今は思うようにしております。

2021年度では、通常の認定業務に加えて、資格取得や更新に関わる規定そのものを今一度見直したいと思います。それは、現状の活動に沿うような、あるいは社会的責任やスポーツ文化の独自性を加味していくような規定の改定を目指した仕事と考えております。指導士がスポーツ現場で活躍する機会は増えてきておりますが、そこでの実際の活動は多岐にわたっており、現行の指導士規定の見直しは迫られていると考えています。学術的基盤に支持された内容だからと一方的に指導するだけでは、一時的には受け入れられても、継続的な関わりには繋がらないのではないかと個人的には思うところがあります。スポーツ現場は日々進化しておりますし、アスリートや指導者の求める心理的な支援は重層的なものと感じます。その具体的内容についてはここでは触れませんが、学術的基盤のある資格だからこそ提供できる質の高いものを目指したいです。そのため、資質向上部門と連携し、資格の基準も見直していきたいと思っています。引き続き委員会の活動に対してご協力をお願いいたします。

今年度の資質向上部門活動の振り返り

資質向上部門長 秋葉 茂季 (国士舘大学)

今年度(2020年度)から資質向上部門の部門長を務めています、秋葉です。今年度より部門員も新たになり新しい体制での活動をスタートしました。これまでの資質向上部門が行ってきた活動を踏襲しつつ、新たな段階へ歩みを進めていけたらと考えています。ここでは、今年度の活動を振り返り今後の部門活動の方向性をお示ししたいと思います。

今年度はこれまでの活動と同様に、学会大会時における全国研修会の開催と地域で開催される単発型研修会、継続して開催される定期型研修会の開催補助やポイント認定の確認作業等を行いました。今年度の研修会はほとんど全てがオンラインによる開催となり、地域を超えた参加者が見られるなど盛況であった一方で事例検討会を通常通り行うことが困難でした。





これまで資質向上部門では、スポーツ心理学全般の知見を学ぶ事とともに事例検討会へ参加することを推奨してきました。事例検討会では、学会誌や学会大会などの学会活動で得られたスポーツ心理学全般の最新知見や研修会による講演やレクチャーにより知り得た知識・スキルが実践でどのように活用されるのか、選手や指導者さらにはチーム・集団の心理をスポーツ心理学の学術的専門性からどのように読む(理解する)のか、サポートは具体的にどのように展開されていくのか、これらについて個別性の観点からみていくことになります。その意味では常に新奇性に触れることができる機会となるので、実践を続けていく上では必要不可欠であり終わりのない学びの場と言えます。実践経験がない、もしくは少ない初学者にとっては事例に触れる貴重な機会であることも間違いありません。

現在の社会情勢を考えると、今後、研修会の開催状況・形態が多様化することが考えられます。資質向上部門では、それでも事例検討の場を安定的に設けていけるように計画・情報発信していきたいと考えています。さらに、資質向上部門の役割は、事例検討会を実施するように促すだけでは

2020年度社会連携部門の活動の振り返り

社会連携部門長 菅生 貴之 (大阪体育大学)

私は本年度より資格委員会に入り、社会連携というとても重要な仕事を担当させていただくこととなりました。以前、『資格認定員会』という名称であった頃から、資格関連のお仕事は少しずつさせていただいていたのですが、ここ最近は少し離れていたこともあり、今年度は少しペースをつかむのに苦労してしまいました。部門員の皆様の協力で、少しずつではありますが社会連携をどのように推進していくかについて議論を進めています。日本スポーツ心理学会がスポーツメンタルトレーニング指導士資格を認定しているわけですが、あくまでも専門的資格としての学術的、実践的水準

ないと考えています。今年度を通して部門内で検討されてきた一つの事項に研修自体の質の向上があります。特に上述した事例検討会については、事例検討会の必要性や多様な実施方法(オンライン上でも安全に実施する方法など)を提示することに加え、資質向上部門から各地域に指定討論者や発表者を派遣していくことや、事例を示す方法や検討の仕方・観点などを教示するような教育的アプローチも積極的に行なっていきたくと話合われました。そのような活動を通じて、スポーツにおける心理サポート活動の事例検討とはどのような内容を含み何を検討するのかといった整理を進め、明文化した形で提示していくことも目指します。これらの活動が、若手を中心とした地域での自由で豊かな研修会・研究会の開催につながっていけばと考えています。

段階的に数年をかけて行う活動かと思いますが、資質向上部門自体も研鑽し成長していきたいと考えていますのでよろしく申し上げます。また、数名で行う小規模の事例検討会については、地域の部門員に相談していただければ開催に向けたお手伝いをさせていただきます。ご相談ください。

を下げないようにすることが学会にとっては最重要課題であったと思います。資格認定部門、資質向上部門は、そうした学会認定資格としての水準の維持において重要な役割を果たしてきた業務であり、今後も継続的に取り組んでいくことであるのは間違いありません。

一方、スポーツメンタルトレーニング指導士の資格が発足してからおよそ20年が経過しています。そうした中で、脈々と引き継がれてきた上記2つの重要な部門活動に、近年になって社会連携という新しい業務が発生してきたと言えると思います。社会連携部門はその名の通り、学会が認定



する専門家と社会的な要請とをつなぐ場であると考えられます。厳しい資格の認定と、継続的な資質向上の上に、いよいよ社会に役立つ資格にして行くことに取り組むのが本部門と言えます。

現状で考えていることは、①ニュースレターの普及誌への発展、②競技指導現場とSMT指導士をつなぐ、ホームページの作成、といったことが検討されています。

まず①については、今この文章が記載されているニュースレターをより発展的に、別の形式にすることが検討されています。例えばSMT指導士の皆さんの様々な活動をレポートし、読者として想定している、エリートアスリートから地域少年団まで、幅広い水準の競技者やその指導者に紹介していくような内容を目指しています。

また、②のホームページは以前より検討されてきたものです。例えばある地域の指導者が、「自分の地域に近く、自分のチームの特徴にあったSMT指導士を探したい」という要望を持っていた時に、ホームページを介して「検索」できるようなシステムです。指導者が地域性、年齢、性別、種目、必要な心理技法などを基に検索条件を設定して、検索できるようなことができれば、まさに競技力向上の現場からの要望とSMT指導士をつなぐことができます。こうしたことは、システム構築はそれほど技術的に難しくないのかもしれませんが、業者などを選定して、作り上げることはおそらくすぐには言いませんが出来上がるのではないかと

と思われます。

では、なぜ今の段階でそれができないのか、というと、そのホームページに記載する内容をどのように担保するか、ということがとても難しいからです。これは資質向上や資格認定の部門の活動とも深く関連しているのですが、例えば資格認定を受けたSMT指導士が、どのように自分をアピールするか、ということを制限する必要があるのか、あるいは自由に表現してもらおうのか、ということがよく議論されています。または、情報として単にプロフィールだけを記載するという案もあります。

なぜこうしたことに慎重になるかということ、個人がアピールする内容は、例えば学術論文のようにわかりやすいものとは限らないわけです。「自分はサッカー選手のメンタルトレーニングが得意」という記載に対して、私たちはそれを検証する方法がないわけです。学会として資格を認定している以上、客観的に、時には科学的に、そうした内容を精査して、本当に正確な情報を扱うことは重要な責務です。

社会連携部門は、SMT指導士の皆さんの活躍の場を広げていくためにも、また、基本的な研鑽過程を踏んでいない、「心理専門家」を自称するような風潮と相対するためにも、重要な業務と考えています。今後とも、社会部門の活動に注目していただいて、忌憚のないご意見を賜りたいと考えています。

Ⅲ. 資格取得者の抱負

SMT指導士資格を取得して

坂中 尚哉 (香川大学大学院)

2020年4月にSMT指導士を取得し、1年が経過しようとしています。この1年は、国内いや世界中の誰しものがコロナ感染症に悩まされ、気の抜けない日々を過ごし、まさに世界規模の災害に被災していると言えます。こうして原稿を書いている今は、東日本大震災から10年を迎えようとして

います。本来ならば、東京オリンピックを終え、日本中がオリンピック景気に酔いしれていたかもしれません。しかし、現実とは違います。未だ、コロナ感染症の第4波や変異種への恐怖、そしてワクチンへのささやかな期待と不安を抱えながらの日常であります。





さて、この1年間を振り返りますと、僕は2020年4月に現在の職場へ転職したこともあり、1回目の緊急事態宣言時には、神戸の自宅で自粛生活をしていました。辞令交付の初日のみ出勤し、およそ2ヶ月近く在宅勤務をしていたこととなります。僕のお仕事は、臨床心理士、公認心理師の養成大学院の臨床指導等になります。特に附属相談室の運営に関わっていることもあり、緊急事態宣言下では、多くの相談室が面談休止に至ったことだと思います。ましてや転職間もない相談室にてケース担当や臨床指導(SV)もなく、しかも在宅での日々、正直、自分が何者であるのか、これまで味わったことのない不安を体験し、宙をさまよう感覚にもなりました。正直息苦しく、転職のタイミングを見誤ったのではないか、大袈裟ながら、自分の人生の選択に「カミサマ」が味方してくれていない状況に不穏な未来を予測したりもしていました。そうした不確かな時に、ふっと舞い込んできたのが、アスリートへのオンラインによる心理サポートの依頼でありました。これまで本務とは別に関わっていた競技団体より個別に相談があったのは、4月中旬でした。ここでは、その取

組みの詳細は省きますが、およそ2ヶ月間みっちりアスリートへのオンラインによる心理サポートの実践に取り組むことができました。改めて感じることは、僕自身が選手から心理サポートを受けたような心持ちにもなりました。本当にアスリートやスタッフのみなさんにずいぶんと助けられました。

さて、僕の心理臨床では、一般心理臨床が8割、アスリートが2割というところでしょうか。25年前にスポーツカウンセリングに興味を持ち、その後臨床心理学にどっぷりはまり、SMT指導士資格取得を志した折より、再びスポーツ心理学との接点や重なりを持てるようになりました。正直、このSMT指導士資格がどのように自分にとって意味のあるものとなるのか、正直わかりません。しかし、僕が心理臨床に従事する中で、中込四郎先生や鈴木壯先生からたくさんことを学び、影響を受けてきています。ですから、僕自身がSMT指導士資格の持つ事の意味を自分なりにゆっくりと大事に育てていきたいと思っています。

これからもどうぞよろしく願いいたします。

「人の役に立ちたい」の奥にあるもの

中村 珍晴 (神戸学院大学)

私がスポーツメンタルトレーニング指導士を目指したきっかけは、競技中の怪我により障害を負ったことでした。天理大学1年生のときにアメリカンフットボールの試合中、相手選手にタックルした際に首を骨折し、後遺症により車椅子生活となりました。当時は、歩けないことはもちろんですが、それ以上にプレーヤーとして復帰できないことに対する喪失感が大きく、なかなか立ち直ることができませんでした。しかし、この経験を通じて、いつかは自分と同じように競技中の怪我で悩むアスリートの役に立ちたいという気持ちが芽生え、メンタルトレーニングを学ぶために大阪体育大学大学院に進学することを決めます。まさに自

分の経験を生かして「人の役に立ちたい」という気持ちが大学院進学のも動機でした。

大阪体育大学大学院では、偉大な先生方に研究とメンタルトレーニングのご指導を賜りました。研究では荒木雅信先生、土屋裕陸先生の研究室でスポーツ傷害をきっかけとした心的外傷後成長(人間的な成長)をテーマに調査研究を行いました。また実践では土屋裕陸先生、菅生貴之先生を顧問とする学生SMTチームにて、メンタルトレーニングについて学ばせていただきました。研究と実践の両方においてご指導を受けることができた環境は、自分が教員の立場になり、恵まれた環境だったと改めて感じています。



大学院で研究と実践に取り組む中、自分の浅はかさを実感した出来事があります。それは個人サポートで関わっていたアスリートが競技中に受傷し、その後のサポートで経験した出来事です。そのサポートの中で、私は自身の経験や心的外傷後成長に関する話題を提供しました。その際に「怪我からの成長があるのはよく分かりますが、今の自分にとってそれは酷です」と言われました。この言葉を聞いたとき、大きな衝撃を感じたことを今でも覚えています。当時の私は、自分の経験や研究をもとにサポートすることが、受傷アスリートをエンパワメントすることに繋がると心のどこかで期待していました。今振り返ると大変おこがましいサポートをしていたなと恥ずかしくなりますが、当時はそのことを分かっていたませんでした。

その後、このサポートについてスーパーバイズを受ける中で、自分の本心に気がつきます。それは「研究やサポートをすることで、アメフトで障害を負ったことを意味あるものにしたい」と思っている自分がいる」ということです。言ってみれば「人のために」と言いながら、結局は研究もメンタルトレーニングも「自分のために」やっていました。

IV. 各地区の活動報告

北海道・東北地区部門員としての問題提議

小谷 克彦 (北海道教育大学)

北海道・東北地区では、スポーツメンタルトレーニング(SMT)指導士の資格を有している者が少なく(2020年時点で8名)、年1回開催しているスポーツメンタル指導士会主導の研修会の参加者は、学部生や大学院生、さらには小学校・中学校・高校での教員といった資格取得者以外が多いです。また、北海道・東北地区では心理サポートに対する認知が広がっていないようにも感じます。スポーツ現場の方々は「心理サポートは何をしてくれるの?」といった印象を持っておられるのではないのでしょうか。そのため、北海道・東北地区での研修会の内容は、資格を取得していない方々を対象

自分の弱さにフタをして相手から感謝されることで自分の存在価値を見出していたのだと思います。この一件で、改めて「今一度、なぜ研究やメンタルトレーニングをしたいのか」について考えるようになりました。現時点では「やはり人の役に立ちたいから」という結論に至っています。ただ以前と異なるのは、「誰かに感謝されなくても自分には価値がある」と思えるようになったことです。今は人の役に立つことを通じて自分を満たすのではなく、ただ研究やサポート活動に自分なりのやりがいを感じています。

「人の役に立ちたい」の奥にある「役に立たないと、自分の存在価値がないような気がするから」という「無価値観」に気がつくことができてから、サポートに取り組む姿勢が少しずつ変化したように思います。アスリートの心に寄り添い、伴走する中で自分の無力さに落ち込むこともありますが、同時に豊かな成長をする機会もいただいていると感じています。まだまだ未熟ですが、無力な自分と向き合いつつ、少しでもまともなサポートができるようにこれからも精進します。

にした内容や心理サポートについて幅広く知って頂くといった心理サポートの紹介といった意味合いを強くすることが必要である現状であるとは思いますが、私個人的には、このような現状にあっても個人の資質向上を目指した内容を考えることが大切だと考えています。これはこれからSMTを学ぼうとする方々や現場の方々をないがしろにするわけではありません。むしろ、そのような方々と一緒に、「心理サポートとは何か?」や「心理サポートに必要な個人の資質とは何か?」といったことを一緒に考えていける場にしていくことが大事であると考えています。





SMT指導士の資格ができて20年経ちました。20年経った今、様々な心理サポートのあり方が発展してきたと思います。しかし、その反面、様々な心理サポートがスポーツ現場の方々からは「何をしてくれるのか？」といった疑問も多くなったようにも感じます。私自身、研修会に参加して、「現場の人は混乱しているだろうな」と感じる事が多かったです。SMT指導士がスポーツ現場に提供する心理サポートについての統一した観点を改めて考え直す必要があると思います。その観点とは、心理スキルトレーニングかカウンセリングか、認知行動療法かといった方法の問題ではなく、「一緒に考える」という観点到立ち戻ることが大切であると思います。スポーツ現場の方々からは、SMT指導士は「心理サポートを提供してくれる人」と思われていると思いますが、そうではなく、「困っている現状・現象について一緒に考える人」という認識を定着させることです。「一緒に考える人」ということは、心理スキルトレーニングでもカウンセリングでも一緒であると思います。

一緒に考えるのは、スポーツ現場の方々だけではありません。SMT指導士資格取得者の方々とも同様です。これまでの研修会は、どちらかという研修会企画者が「話題を提供する」という観点が強かったように思います。「SMT指導士に求められる資質とは何か？」「心理サポートとは何か？」について研修会参加者の間で議論を重ねる機会・時間を作っていく必要があると思います。また、研修会参加者間で議論を重ねるためにも、研修会を北海道・東北の各地域で開催できればと

地区部門員としての問題提起

関東地区部門員 平木 貴子（日本大学）

本年度（2020年度）より資質向上部門の関東地区部門員を仰せつかりました。右も左も分からない中で、部門長をはじめ他の部門員の方々に助けをいただきながら、何とかこの1年役割を勤めさせていただきました。ご助言・ご助力を賜りまし

も思います。

さらに、「一緒に考える」ことは簡単ではありません。一緒に考えるための資質向上が求められると思います。その方法として、事例検討会の充実が必須であると思います。事例検討会こそ、参加者同士で一緒に考える場です。ただ、北海道・東北地区ではSMT指導士資格取得者が少ないということもあり、実際にスポーツ現場に関わっている人が少なく、事例を発表できる人が少ないという問題があります。しかし、この「事例を発表できる人」という考え方も考え直さなければいけないと思います。何を持って「発表できる人」とするのか。心理サポートを実践している人は少なくとも、スポーツ現場に関わっている人は少なくないと思いますし、その現場で困っている方々も少なくないはずで。ひょっとしたら、「事例の発表の仕方がわからない」「実践のまとめ方がわからない」、さらには事例検討会に対して抵抗感を感じている人もいるかもしれません。SMT指導に適した、スポーツ現場に適した事例検討のあり方を模索することも現状の課題であると思います。事例検討会のあり方についても一緒に考えていき、その結果、事例検討会が一緒に考える場になっていければと思います。

このように「一緒に考える」ということは、少人数の北海道・東北地区だからこそできることであると思います。SMT指導士としての資質について、さらにはその資質の向上について一緒に考えていくことができればと思います。

た先生方にこの場合をお借りしてお礼申し上げます。

本年度、私が部門員として主に携わった活動は、11月に開催された全国研修会の運営と、スポーツメンタルトレーニング（以下SMT）指導士会の関



東支部が主幹する研修会（全国研修会と関東地区研修会）のポイント申請でした（各研修会の内容は日本スポーツ心理学会およびSMT指導士会のホームページをご参照いただければと思います）。研修ポイント認定制度は、資格取得者の有志が集まった会でもポイント申請することができます。部門員としては、学会やSMT指導士会の研修会以外にも、研鑽の場に関する情報提供を行えたらという想いがあります。しかし、本年度はSMT指導士会関東支部以外からの申請はなく、その背景として（新型コロナウイルスの影響で活動が制限されていることも一因かもしれませんが）、「ポイント申請方法の明確化」「自己研鑽の場に関する情報とポイント認定制度の周知」に課題があると感じました。

【ポイント申請方法の明確化】

各地区の部門員として、担当地区で実施される研修会（定期型・単発型）の申請を受けて、資質向上部門に研修ポイント及び補助金の申請を行うという役割があります。本年度から部門員を引き継いだわけですが、部門への申請方法について、いつまでに誰がどのような手続きが必要なのかなど、部門員になったことで初めて具体的な手続きについて把握した点がありました。学会HPで申請方法やポイント認定の条件など記載されておりますが、資格取得者の皆さまにこの制度を積極的にご利用いただくためには、申請方法をより分かりやすく情報提供する必要があると感じました。

【自己研鑽の場に関する情報とポイント認定制度の周知】

関東地区は最も資格取得者が存在する地区です。

資格取得者のほとんどが5年ごとの資格更新をされていることから皆さまが心理サポート活動や研鑽を継続的に積み重ねていることが分かります。当然、各自で行われている研修会や勉強会、事例検討会のような研鑽の場があると思うのですが、どこでどのような研鑽の場が存在しているのかを把握できておりません。このポイント認定制度は、地区で行っている自発的な自己研鑽の場の醸成という目的があります。各資格取得者が日々研鑽を積み重ねていることを把握し、適切にポイント認定していくことは、部門として積極的に進めていくべき活動だと思います。ポイント申請は自発的に行われるべきことですが、まずは皆さまがどのような研鑽の場を持たれているのかについて、情報交換や情報収集を行い、ポイント申請制度についてご理解いただくことが必要だと感じています。ポイント認定される自己研鑽の場が増えれば、各自が創意工夫して構築した多様な研鑽方法を資格取得者同士で共有することや、より有益な研鑽の在り方を模索することも可能となります。部門でそれらの情報を収集することで、自己研鑽の場を求めている方への情報提供も可能になるのではないかと思います。

本年度は部門員としての役割を把握することで終わってしまいましたが、残りの任期で上記課題について改善できるよう努めたいと思います。改善に向けた動きの中で、情報提供やご意見を賜ることもあろうかと思います。何卒、ご協力のほど、どうぞ宜しくお願いいたします。

東海・北信越地区の特徴・課題と今後の活動について

村山 孝之（金沢大学）

東海・北信越地区におけるスポーツメンタルトレーニング指導士の資格取得者は、2020年時点で19名と、それほど多くはありません。地区での活動は、SMT指導士会の研修会や、地区に所属する取得者が独自に行なう研修会、ならびに事例検

討会です。地区でまとまって活動する機会になるのは指導士会の支部研修会であり、年に一回開催しており、東海エリアと北信越エリアの2つに大きく分け、研修会の企画を年ごとに交互に担当するようにしております。2019年度は北信越、とり





わけ金沢での開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、止むを得ず開催直前で中止と判断することになりました。そのため、2020年度は引き続き北信越エリアの会員が主となり、2021年3月にオンラインでの研修会を開催する予定で準備を進めております。

1. 東海・北信越地区、当該エリアの特性と問題点

地区の特徴として、対面で活動しようとした場合、地理的な問題もあり、定期的集まるのが難しいという点が挙げられます。集まりやすいのは名古屋近辺や金沢近辺となりますが、どちらに集まるにしても移動に3時間ほど要しますし、岐阜や長野近辺に集まるにしてもやはり移動に2時間程度かかってしまいます。こうした地理的な特性が、これまで地区における対面での活動を困難にしてきました。

しかし、コロナを機に、オンラインという選択肢が増えました。今後はオンラインを上手く活用して地理的な障害を乗り越え、資質向上のための機会を設けることが課題とも言えます。場合によっては、対面とオンラインのハイブリッド型でも良いわけですので(移動が困難な会員はオンラインで参加するなど)、既存の考え方にとらわれず、地区の特性に合った研修機会のあり方を検討していく必要があります。ただし、事例検討会の場合にはセキュリティの問題もあるため、オンラインでいかに適切に行うことができるか、事前に十分な検討を重ねなければなりません。

また、研修会や事例検討会をオンラインで行うだけでなく、資質向上のための活動情報を相互に共有できるシステムも必要だろうと考えております。それぞれ、拠って立つ理論も多様ですので、その多様性を生かした取り組みを積極的に進めようとした時、例えば、メール、SNS、あるいはアプリなどをより有効に活用することで、こうした課題はクリアできるかもしれません。

2. 今後の研修会の展開

各種研修会や事例検討会の開催を検討していく

予定です。上述したように、とりわけ東海・北信越地区の場合は資格取得者数が関東や関西ほど多くなく、活動エリアも広範囲に散らばっております。したがって、まずはスモールグループで資質向上につながる機会を用意し、オンラインで遠方からも参加できるようにすることを課題にしたいと考えております。

2020年度は以下のような指導士会の支部研修会を予定しております。

アントラージュの観点から、資格取得者が専門家として選手やチームに関わる際に、どのような知識や資質が求められているのか。そのことについてあらためて考える機会を提供すべく、以下の3つのセッションを用意しております。

セッション1、3は、資格取得者としての資質と知識について考えるためのセッションです。この2つのセッションでは、選手や指導者、そしてチームの状況に適切に対応することを求められる中で、我々専門家に求められる資質とはどのようなものなのか？(講師：平真由子氏) また、認知行動療法の考え方をサポートで活用する際に注意すべき知識とはどのようなものなのか？(講師：伊藤大輔氏) の2点について考えます。

セッション2は、現場の指導者が我々に求める心理サポートについての理解を深め、自らの資質向上につなげるためのセッションです。今回はトランポリン女子日本代表チームを率いる丸山章子氏をお招きし、代表チームを率いる指導者としての視点から、どのようなサポートや資質、ならびに専門性を求めるのかお聞きしたうえで、専門家としての課題について整理する、あるいは振り返りを行う機会になればと考えております。

【SMT 指導士会:2020年度東海・北信越支部研修会】

日時：2021年3月21日(日) 10:00-16:10

開催形態：オンライン開催 (Zoom)

挨拶 (黒川)、司会進行 (村山)

セッション1

「SMT 指導士に必要なコンピテンシー」

講師：平真由子氏 (白山市立松任中学校)



司会：門岡 晋 (金沢星稜大学)
セッション2
「女性アスリートの指導と求められる心理サポートとは」
講師：丸山章子氏 (トランポリン女子日本代表監督)
司会：村山孝之 (金沢大学)

セッション3
「認知行動療法からみた選手へのアプローチの可能性とは」
講師：伊藤大輔氏 (兵庫教育大学)
司会：黒川淳一 (犬山病院)

部門員として考える関西地区の今後の未来

株式会社 BorderLeSS 筒井 香

これまで3年間、関東地区の部門員を務めておりましたが、今年度より、関西地区の部門員を務めさせていただくことになりました。ただ年数だけが長いのではなく、その経験を今後の活動にも活かしていきたいと思い、スタートした今年度でしたが、新型コロナウイルスという未曾有の事態が起き、これまで実施してきた研修会の形を取ることができず、戸惑いを経験しました。皆様もそれぞれ大変な想いをされたことと思います。

そんな中、今できる方法で、関西地区も研修会を実施しましたが、事例検討会は見送りました。アスリートも、「なんでできへんねん！」ではなく、「どうしたらできるかな？」と工夫しながらトレーニングを行っていることに習って、来年度は、状況を見極めてオフラインの実施、あるいはオンラインでも事例検討会を実施できる方法を、私たちスポーツメンタルトレーニング指導士も模索していきたいと考えています。

さて、関西地区には資格を取得されている先生方と、これから資格取得を目指す学生の方々が多く所属しておられます。そのため、非常に活発で、二日間に及ぶような研修会も毎年企画されています。また、スポーツメンタルトレーニング指導士の資格取得者に加えて、臨床心理士や公認心理士の資格を取得されている方もおられるので、多様な視点から「メンタル」について学ぶ機会を設けられるのではないかと考えております。

物事には多くの場合、良い面と悪い面の両面が存在するものだと思います。多くの方が所属する

ということは、上述しましたように、大きな強みであると思います。その一方で、毎年新しい資格取得者の方が出てこられたり、院生の方が増えていくなかで、お一人お一人を把握することが難しいという側面も、当然生じてきます。このような『課題は新たな目標が仮面を被った姿』であると考えられるため、課題の解決に向けて、今後は、この集団がただの群衆ではなく、一つのチームになれるように、ネットワーク作りの仕組みを整えたいと考えています。

ネットワークをしっかりと構築することで、1) サポート活動の内容把握 (専門のアプローチ方法、対象選手の年代や競技レベル、選手以外の対象者など) ができれば、適切な仲間にリファーすることが可能になると思います。さらに、2) サポート活動の内容把握ができることで、自身がサポート活動についてのスーパーバイズを探す手がかりにもなり得ると考えています。また、3) 研究会や勉強会等の実施予定の共有を行うことで、その存在が互いに刺激になることに加えて、「これまで参加してなかった会に参加してみたい！」という新たなモチベーションも生まれるのではないのでしょうか。

スポーツ心理学会の資格委員会に、資質向上部門が生まれた背景には、地区で開催される研修会にポイントを認定し、補助金も負担するような仕組みを作ること、自主的な自己研鑽の場づくりを促がしていき、資格取得者の資質向上を目指すというものでした。その部門の部門員としての役割を果たすために、人材を把握し、研修の場をオー





ブンにして参加の交流も増やしていけたらと思います。それができなければ、将来、気の合う仲間同士だけの集まりになりかねないと危惧しています。私たちメンタルトレーニング指導士は、スポーツ心理学の学術的背景を持つことが特徴です。スポーツ心理学と一言で言っても様々な専門領域が存在することは皆さんご承知の通りかと思えます。同質性に偏らず、多領域のメンバーが集まることで、多様な視点での議論ができる有意義な研修会の場を作り上げていくことができれば、資質向上

に繋がっていくのでは無いでしょうか。昨今、アスリートのキャリア形成について様々な議論がなされるようになりましたが、これからはスポーツメンタルトレーニング指導士自身のキャリア形成も大切になると、個人的には考えています。ネットワークづくりで有資格者のサポート活動の内容把握ができ、開かれた研修の場が増えていくことは、今後資格を取得する次世代をも含めたキャリア形成にも、良い影響を与えると期待しています。

中国・四国地区の部門員としての問題提議

崔 回淑(環太平洋大学)

「先般地方のスポーツ指導者研修会の講師を務めた際に、参加者から次のような質問を受けて、SMT指導士の専門性や資質について改めて考えさせられたことを覚えます。

「スポーツメンタルトレーニング指導士は他と何が違う？」

「スポーツメンタルトレーニング指導士なら誰でも信用できる？」

いずれもその答えは、「研究・研修・指導」の実績を積み上げた「科学的知識を持った実践家」に通じるのですが、2つ目の質問からは、SMT指導士有資格者の質を担保できる研修の重要性を再認識することができました。今後資格委員会の資質向上部門員の1人として中国・四国地区で活動するにあたり、これらの思いを大切に、研修会の企画・運営に携わりたいと思います。

中国・四国地区の研修活動は、個々の有志で設ける研修の場はなく、主に年に1回指導士会主催の研修会を行っています。会員の状況は、SMT指導士資格取得者が2020年時点で17名登録しており、研修会には有資格者の参加率が高いことが特徴として挙げられます。本年度の場合、新型コロナウイルスの影響のためオンライン開催になりましたが、他地域の参加者を含めて例年を上回る30名が参加され、そのうち3分の2以上を有資格者



提供だけのやり方に限界を感じたり、今の関わり方にどこか違和感を覚え、自身の取り組みを見直すきっかけを求める声を聞くことがあります。この点に関しては、研修会のアンケートにも事例からの学びを求めるコメントが多く寄せられており、事例検討への期待が高まっていることを実感しています。有資格者の先生方にはぜひご自身の活動を発表していただきたく思います。事例を提供す

る側になると、活動の詳細を記録する作業をはじめ、発表資料の作成など、特に初学者にはさらに理解を深めなければならない課題もありますが、それらに必要な知識や技法を併せて研修プログラムに盛り込むなどの工夫もしていければと思います。さらに、資格委員会の補助金制度を有効に活用し、必要に応じて地域外から指定討論者を招聘することも検討していく予定です。

地区の部門員としての問題提議

内田 若希(九州大学)

昨年度までの九州・沖縄地区における研修会は、例年3月に開催される九州スポーツ心理学会と同時期に実施してきました。この研修会の企画・運営に際し、福岡地区で定期的に開催されていたメンタルトレーニング研究会(通称メントレ研)のメンバーが、その中心的な役割を担ってきました。九州・沖縄地区における問題には、このメントレ研の課題が大きく関与していると考えます。

メントレ研は、故・岩崎健一先生(熊本大学名誉教授)と徳永幹雄先生(九州大学名誉教授)を中心に発足し、当時の若手教員や大学院生が集まり、月に1回の頻度で開催されていました。私が初めて参加したのも、まだ大学院博士課程に在籍していた頃になります。それから15年以上の時を経て、若手と呼ばれていた先生方は大学で重責を担う立場に就かれて多忙になり、また多く在籍していた大学院生も修了後、全国各地へと散らばっていき、そして、その流れと時を同じくして、メンタルトレーニングの指導に興味をもつ大学院生の数も減り、メントレ研への参加者は、残念ながら減少の一途をたどりました。このため、メントレ研も、2~3ヶ月に1回の開催に変更となりました。

九州・沖縄地区に在住のスポーツメンタルトレーニング指導士の有資格者は、2020年度現在において15名いますが、その顔ぶれはほとんど変わっていないのが現状です。このような中で、九州・沖縄地区における研修会等に登壇する講師が固定的

になったり、またメントレ研や九州体育・スポーツ学会と同時開催していたメントレセミナーへの参加者も伸び悩んだまま、解決策が見出せずになりました。

これを受けて、2019年度末に、メントレ研に参加しているスポーツメンタルトレーニング指導士を中心に話し合いを行い、①九州スポーツ心理学会の初日・午前中に勉強会を開催すること(ただし、スポーツメンタルトレーニング指導士資格のためのポイントの付与は行わず、熱量の高い参加者を募ることで、質の高い人材の育成・確保を目指す)、②8~10月の間で、スポーツ心理学研修会を開催すること(スポーツメンタルトレーニング指導士資格のためのポイントを付与。九州・沖縄各地の有資格者以外の先生にも講師を依頼することで、新たな角度から資質向上を目指す)、③メントレ研の定期開催を休会とし、事例検討や研究計画発表など希望者がいる場合は、随時開催することを決定しました。

このように、新たな取り組みを始動させることを決定した2020年度でしたが、ご存知の通りコロナ禍に見舞われ、対応が間に合わず、今年度は九州・沖縄地区において研修会を開催することが叶いませんでした。これは、部門員として痛切に責任を感じるところであります。

来年度は、状況に応じてオンライン開催を検討し、他地区のノウハウなどもシェアさせていただ





きながら計画的に準備を進めていきたいと考えています。加えて、九州スポーツ心理学会との連携強化、九州・沖縄各県のスポーツ協会との良好な関係づくりなども、九州・沖縄地区のスポーツメン

タルトレーニング指導士の資質向上に向けて重要となってくるでしょう。そして、今年度実現できなかった取り組みの改善を進め、九州・沖縄地区に新たな風を吹き込んでいきたいと考えております。

V. 研修会・傍聴記

2020年度SMT指導士研修会(Web開催)

門岡 晋(金沢星稜大学)

11月23日(月)にスポーツメンタルトレーニング指導士研修会(Web開催)が開催され、私も参加しました。今年、新型コロナウイルスの影響により、東京大会も延期され、多くの活動に制限がかかりました。釈然としない気持ちもどこかで抱えつつ、それでも「今、できること」に注力しながら過ごしていました。そのような中、研修会についてご案内をいただき、1日ゆっくりと自分自身の取り組みについて省みることができる、そうか、「ゆっくりと考える」ことも「今、できること」だなどという思いで申込みをしました。結果、自身のSMT指導士としての内省を深めていく、大変充実した研修会となりました。

研修1では、「個別サポート開始時における関係性の構築」というテーマで荒井先生から話題提供がなされました。心理サポートにおける関係性の構築について、説明する、訊ねる、心がける、契約する、という観点から荒井先生の事例もお示しいただきながら考えていきました。なかでも、「契約する」という点で、①お金をとる or とらない ②とるとしたらどれくらいの金額設定が良い? ③選手からとるべき? or 紹介者(ex. 指導者、親)からとるべき?、など議論されたことが印象的でした。また、それらの「契約」をする過程そのものが見立てに役立つのでは? という意見もあり、まさに“関係性の構築”について考えさせられるセッションとなりました。

研修2では、「チーム(集団)における個別サポートの導入」というテーマで、内田若希先生、武田大輔先生から対談形式による話題提供がなされま

した。ご自身のサポート内容について思い起こしながらご自身の言葉で“語られている”感じがとても印象的でした。集団の中で個別サポートを導入していく際、集団力学として何が生じているのか(マクロな視点)、個人レベルで(あるいは個人の“物語”として)は何が生じているのか(ミクロな視点)、をもつことが重要だと学びました。これらを実現するためには俯瞰的に自身のサポートをみる“眼”を養っていくことが大切であり、指導記録を通した“振り返り”の過程が不可欠であることを改めて感じました。また、“振り返り”を通した自身のサポートに対する「捉え方」や「意味づけ」は、1回で完結するわけではなく、サポートをしていく限り続くもの、というお話も自身の経験として腑に落ちるお言葉でした。ある日ゆっくりと日常を過ごしている時にもまた、それらの「捉え方」や「意味づけ」も変わり得ることから、SMT指導士としてはそれらに自覚的であること、というお話も深く考えさせられました。河合隼雄先生がよく著書のなかで、カウンセリングの過程についてカウンセラーとクライアントとの“発見的な歩み”と表現されています。内田先生も武田先生も、自身の事例を思い起こしながら話題を提供してくれていましたが、「語る」なかでまた自身のサポートに対する答えを同時に探しているようにも見えました。私も、SMT指導士として選手(又は指導者、チーム等)との“発見的に歩み”を大切にしつつ、効果的なサポートを展開していきたいと感じました。

最後に、一日かけて、自身のサポートや取り組



みについて話を聴きながらゆっくりと分析できる実りある研修会となりました。ご準備いただいた

スタッフの皆様、ならびに講師の先生方には深く御礼申し上げます。

学会主催研修会に参加して

相川 聖(日本体育大学大学院)

今回の日本スポーツ心理学会主催のスポーツメンタルトレーニング指導士研修会(以下、研修会)は、「個別サポート開始時における関係性の構築」と「チーム(集団)における個別サポートの導入」という2つのテーマのもとで実施されました。以下には、各セッションでの内容および感想を述べさせていただきます。

まず、「個別サポート開始時における関係性の構築」のセッションでは、法政大学の荒井弘和先生より、インテーク面接時に「説明する」「たずねる」「心がける」「契約する」ことについてレクチャーしていただきました。「説明する」ことでは、クライアントにサポートで実施する内容や目指すことなどを説明するとのことでした。「たずねる」ことでは、インテーク面接時のクライアントの主訴について、暫定的なもので良く、そこから「どのようなサポートを受けたいのか」または「その選手がどうなりたいたいか」などを尋ねていくとのことでした。また、インテーク面接中に「心がける」こととして、クライアントから聞いた話を外在化するために、クライアントに見えるように状況を書き出していき、クライアントが学生であった場合には「あえて相手が否定するような質問をする」などが挙げられていました。特に、クライアントから聞いた話を外在化することは、クライアントとインテーカーの頭の中の整理や聞き違いの防止に役立つ方略であると感じました。他にも、「契約する」こととしては、サポートに関する契約金の話題もありました。私は日本体育大学の学生を対象としたサポートを行っているため、これまでにチームや選手と契約金の話をした経験がありませんでしたが、研修会でのサポートの契約に関する話は、そういった経験がない方々にとって非

常に有益な研修になったと感じました。また、その後の質問では、登壇された先生方が共通してインテーク面接時に「クライアントの話しやすいことを聞く」ように心がけていることが窺えました。そのようなインテーカーの姿勢はクライアントが感じる「話しやすい雰囲気」につながるものと理解できました。

次に、「チーム(集団)における個別サポートの導入」のセッションでは、東海大学の武田大輔先生と九州大学の内田若希先生の実践例のレクチャーと両先生の対談を拝聴させていただきました。まず、武田先生はチーム内でのSMT指導士のあり方として「チームを俯瞰的に見るのが重要である」と説明され、その他にも、実際にチーム内で個別サポートを行う場合にはできる限り面接室で行うことや定期的に事例検討を行うことの重要性について述べられていました。また、コーチから特定の選手について尋ねられた時には、「コーチがその選手に対してどのように感じているのか」を聞くことが重要であり、このような関わりがスポーツ現場におけるチームの中でのSMT指導士の役割であると理解することができました。次に、内田先生は多様な他者との関わりの中でのSMT指導士の活動についていくつかの例を用いて説明されていました。その中で、人は自分の考えや思想といった「自分のメガネ」を通して世界を見ており、チームとは「異なるメガネ」をかけている他者の集まりであると説明されていて、非常にわかりやすい考え方だと感じたとともに、チームの中で活動する難しさも再確認しました。また、チームの中でSMT指導士として活動する時には「自分のメガネ」を理解すること(自己理解)が重要であり、そのためにはスーパーヴァイズや教育



分析を受けることを推奨されていました。SMT 指導士として研鑽していくには、まずは自分自身を十分に理解し、それを踏まえた他者との関わりが重要であると感じました。その後は、会場にいらっしやった先生やオンラインで参加されている先生からの質問に対して、両先生ともに実践例も踏まえながらお話をしていました。その中で、SMT 指導士やコーチが選手を変えるのではなく、変わるの選手であり、SMT 指導士は答えを探す手伝いをするのが役割であるということが特に印象に残りました。このような姿勢でチームや個人に関わることが重要であり、監督やコーチにも SMT 指導士の役割として認識してもらう必要があると感じました。また、サポートの際には、「自分の中で動くものを感じる」や「丁寧に自分と向きあう」、

「サポートに行く前の自分自身をなるべくフラットにする」といった話から、他者との関わりにおける自分自身をより深く観察することで、質の高いサポートの実施につながる事が理解できました。

研修会では、登壇された先生方の豊富なご経験の中から、SMT 指導士が活動する現場における有益な情報が提供されていたと感じています。また、コロナ禍においては例年に比べて他大学の先生のお話を伺う機会が少なくなりましたが、研修会では貴重なお話を拝聴することができました。研修会で登壇された先生方をはじめ、研修会を開催して下さった方々に心より感謝申し上げます。研修会で学んだことを活かし、選手に寄り添ったサポートが提供できるよう、今後も研鑽を積みたいと思います。

VIII. 事務局からのお知らせ

(1) 有資格者数：令和3年3月現在で174名(名誉指導士18名、上級指導士39名、指導士117名)。令和2年度に資格を移行・更新された方は以下のとおりです(敬称略)。

- ・名誉指導士：荒木雅信、遠藤俊郎、岡澤祥訓、高妻容一、鈴木壯、中込四郎(以上6名)
- ・上級指導士更新：阿江美恵子、兄井彰、関矢寛史、土屋裕陸、蓑内豊(以上5名)
- ・上級指導士への移行：園部豊(以上1名)
- ・指導士更新：伊藤友記、伊藤英之、栗原啓、杉山卓也、田島誠、平山浩輔、福井邦宗、藤本太陽、松竹貴大、深山元良、百瀬容美子、門利知美(以上12名)

(2) 令和2年度事業報告

令和2年度の資格委員会に関わる事業は表1のように実施されました。

表1 令和2年度 資格委員会事業報告

	事務局	資格委員会
令和2年4月	申請書類の受付(4月~6月末)	
5月		
6月	書類の受付締切(末日)	
7月	申請書類のチェック 資格委員会開催の案内	第1回資格委員会: 申請書類審査, 研修会・講習会の計画, 前年度収支決算
8月	書類審査結果の通知	
9月		
10月		
11月	資格更新・移行手続きの受付(11月~12月末)	第2回資格委員会 資格所得講習会(11/22(日))、SMT指導士全国研修会 (11/23(月・祝)) ※いずれもオンライン開催
12月	最終審査の案内(新規資格取得者)	
令和3年1月	資格更新・移行書類のチェック	
2月		
3月	最終審査料の謝金支払い, 合格通知, 資格認定者の名簿作成, 認定書カード・認定書の作成(更新者含む)	第3回資格委員会: 新規申請者の最終合否判定, 更新・移行 の合否判定, 収支中間報告

(3) 令和2年度スポーツメンタルトレーニング指導士研修会・資格取得講習会プログラム

①指導士研修会

- 日時：令和2年11月23日(月・祝) 10:00 ~ 16:00 (受付: 9:30 ~)
- 会場：オンライン開催
- 参加費：a. 資格取得者：3,000円 b. 一般学会員：5,000円 c. 大学院生：4,000円
- 参加者数：170名
- 研修内容：9:30 ~ 受付
- 10:00 ~ 10:20 資格委員会委員長・資質向上部門長 挨拶
資格委員会委員長：立谷 泰久(国立スポーツ科学センター)
資質向上部門長：秋葉 茂季(国士舘大学)
- 10:30 ~ 11:15 「個別サポート開始時における関係性の構築」
講師：荒井 弘和(法政大学)
- 11:15 ~ 12:15 レポート①作成
- 13:00 ~ 13:45 チーム(集団)における個別サポートの導入①
話題提供者：武田 大輔(東海大学)
話題提供者：内田 若希(九州大学)
ファシリテーター：秋葉 茂季(国士舘大学)
- 14:00 ~ 15:00 チーム(集団)における個別サポートの導入②
話題提供者：武田 大輔(東海大学)
話題提供者：内田 若希(九州大学)
ファシリテーター：秋葉 茂季(国士舘大学)
- 15:00 ~ 16:00 レポート②作成

②指導士資格取得講習会

- 日時：令和2年11月22日(日) 10:00 ~ 16:00
- 会場：オンライン開催
- 令和2年6月末までに資格委員会事務局に所定の申請書類を提出し、書類審査に合格した10名が受講。

【プログラム】

- 総合ファシリテーター：武田大輔(東海大学, 資格委員会 副委員長 資格審査部門長)
- 10:00 ~ 10:10 資格委員会委員長による挨拶
立谷泰久(国立スポーツ科学センター)
- I. 10:10 ~ 11:00 資格と責務
講師：山本裕二(名古屋大学, 日本スポーツ心理学会 会長)
- II. 11:10 ~ 12:00 対象者の特性・特徴を考えたサポートの重要性
講師：立谷泰久(国立スポーツ科学センター, 資格委員会 委員長)
- III. 13:00 ~ 13:50 SMT 指導士の社会連携における、情報発信の際の注意点
講師：菅生貴之(大阪体育大学, 資格委員会社会連携部門長)
- IV. 14:00 ~ 14:50 自己研鑽の意義と資質向上の機会
講師：秋葉茂季(国士舘大学, 資格委員会資質向上部門長)
- V. 15:00 ~ 15:50 事例検討をすることの意味
講師：武田大輔(東海大学, 資格委員会 副委員長 資格審査部門長)

(4) 資格更新・移行

資格の有効期限が令和4(西暦2022)年3月31日までの方の更新・移行手続き期間は本年11月～12月です。個々に連絡はしておりませんので有効期限を必ずご確認ください。なお、資格更新・移行の審査料は不要です。手引き、規約等の文書や必要書類等はHPに掲載されています。ダウンロードをしてご利用ください。

- ・申請には必要な研修ポイントが定められており、それを証明する証明書や領収書等のコピーの提出が求められます。研修会・学会等に参加されたときには各種証明書を受け取り、保管しておいてください。

(5) その他

令和2年度より、情報の一元管理を図るため、日本スポーツ心理学会の会員名簿とSMT指導士名簿の情報を統合することになりました。ご所属先、ご住所、連絡先等を変更された方は早めに学会事務局(kanri@jssp.jp)までご連絡ください。

(6) 令和3年度事業計画

本年度の資格委員会に関わる事業は表2のように計画されています。

表2 令和3年度 資格委員会事業計画(案)

	事務局	資格委員会
令和3年4月	申請書類の受付(4月～6月末)	
5月		
6月	書類の受付締切(末日)	
7月	申請書類のチェック 資格委員会開催の案内	第1回資格委員会: 申請書類審査, 研修会・講習会の計画, 前年度収支決算
8月	書類審査結果の通知	
9月		
10月		
11月	資格更新・移行手続きの受付(11月～12月末)	第2回資格委員会 資格所得講習会、SMT指導士全国研修会 ※学会大会に合わせて実施(令和3年11月26日予定)
12月	最終審査の案内(新規資格取得者)	
令和4年1月	資格更新・移行書類のチェック	
2月		
3月	最終審査料の謝金支払い, 合格通知, 資格認定者の名簿作成, 認定書カード・認定書の作成(更新者含む)	第3回資格委員会: 新規申請者の最終合否判定, 更新・移行の合否判定, 収支中間報告

※10-12月頃に「SMT指導士資格認定20周年記念行事」を実施予定
(詳細は決まり次第ご案内します)

平成31年度・令和元年度 決算報告

令和元年度スポーツメンタルトレーニング指導士資格委員会収支決算報告

一般会計			
収入			
1. 新規資格	認定審査料 18名(各10,000)		180,000
	講習会受講料 17名(各5,000)		85,000
	スーパービジョン料 17名(各5,000)		85,000
	登録料 17名(各30,000)		510,000
		計	860,000
2. 更新登録料	移行・更新1回目 8名(各30,000)		240,000
	更新 14名(各10,000)		140,000
		計	380,000
3. 指導士研修会参加費(筑波大学10月15日)	資格取得者 77名(3,000)		231,000
	学生 37名(4,000)		148,000
	一般 28名(5,000)		140,000
		計	519,000
4. 教本印税			34,570
5. 利子			6
収入小計			1,793,576
前年度繰り越し金			1,524,724
収入合計(A)			3,318,300

支出	
1. 資格認定委員会 旅費及び会議費	92,611
2. 指導士研修会 講師謝金, 旅費, 補助謝礼	496,070
3. 資格取得講習会 講師謝金(5名分)	100,000
4. スーパービジョン料 17名(各5,000)	87,200
5. フォーラム講師謝金	150,000
6. ニュースレター 印刷代, 郵送料他	106,040
7. 認定カード・認定証 作成費, 送料 他	155,670
8. 事務局経費	126,717
9. 記念事業準備金(H30年度分)	300,000
10. 事業費(統合ワーキング, 部門活動, 他)	0
11. 調査活動費(東京2020サポート体制構築調査活動費)	0
支出小計(B)	1,614,308
次年度繰越金(A)-(B)	1,703,992
支出合計	3,318,300

特別会計: 記念事業準備金

前年度残高	3,500,000
貯金利息	28,927
残高	3,528,927

<会計監査報告>

スポーツ心理学会資格委員会の会計監査を行い、領収書等のすべての会計書類を照合した結果、決算報告通り、相違ないことを認めます。

令和2年8月11日
 監査 若木香織 (印)
 監査 手塚洋介 (印)



編集後記

スポーツメンタルトレーニング指導士ニュースレター 18号をお届けいたします。

昨年この小冊子を編集している折は、COVID-19の世界的な蔓延により、東京オリンピックの開催延期が決まった頃でした。それから一年、多くの方が生活様式や仕事のスタイルの変更を余儀なくされ、厳しい日々を過ごされたのではないかと想像します。学生の指導や競技者の支援の仕事上も、これまでの競技力向的な支援のほかに、そうしたスタイルの変更への不適応や戸惑いに対する、「精神的なケア」の仕事をした方も多かったのではないのでしょうか？様々な意味で、これまでの日常がどれほど素晴らしいものであるかを思い知らされた一年であったと思います。

そうした中で、私の個人的な体験ではありますが、例えば心理の面談をオンラインで実施することや、会議システムなどを利用した講習会のグループワークなど、これまで想像もしなかった形でのサポートが求められ、必要に迫られて実施した結果、私の活動に新しい方略をもたらしてくれた面もあります。オリンピックの延期など、誰一人として想像していなかったことが現実起こったわけですが、こうしたことはこの後、私たちの生活や仕事にどのような意味を与えてくれるのでしょうか？

学会および学会の研修会も今年はオンラインでの開催となりました。対面だったらできたであろうことができない側面もありつつ、逆にオンラインだから得られたものもあり、それらの新しい邂逅が、SMT指導士の皆様の活動に恩恵をもたらしますことをお祈りしております。

最後になりましたが、急なお願いにもかかわらず早く原稿を提供していただいた執筆者の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。 (菅生貴之)

日本スポーツ心理学会認定
スポーツメンタルトレーニング指導士

ニュースレター 第18号
2021年(令和3年)5月31日発行

編集・発行

日本スポーツ心理学会スポーツメンタルトレーニング指導士資格委員会

事務局

〒115-0056 東京都北区西が丘3-15-1
国立スポーツ科学センター 心理グループ内(立谷泰久)

E-mail: jssp_mtcs@yahoo.co.jp

郵便振替口座

口座番号 00800-8-120103

口座名称 日本スポーツ心理学会資格認定委員会

